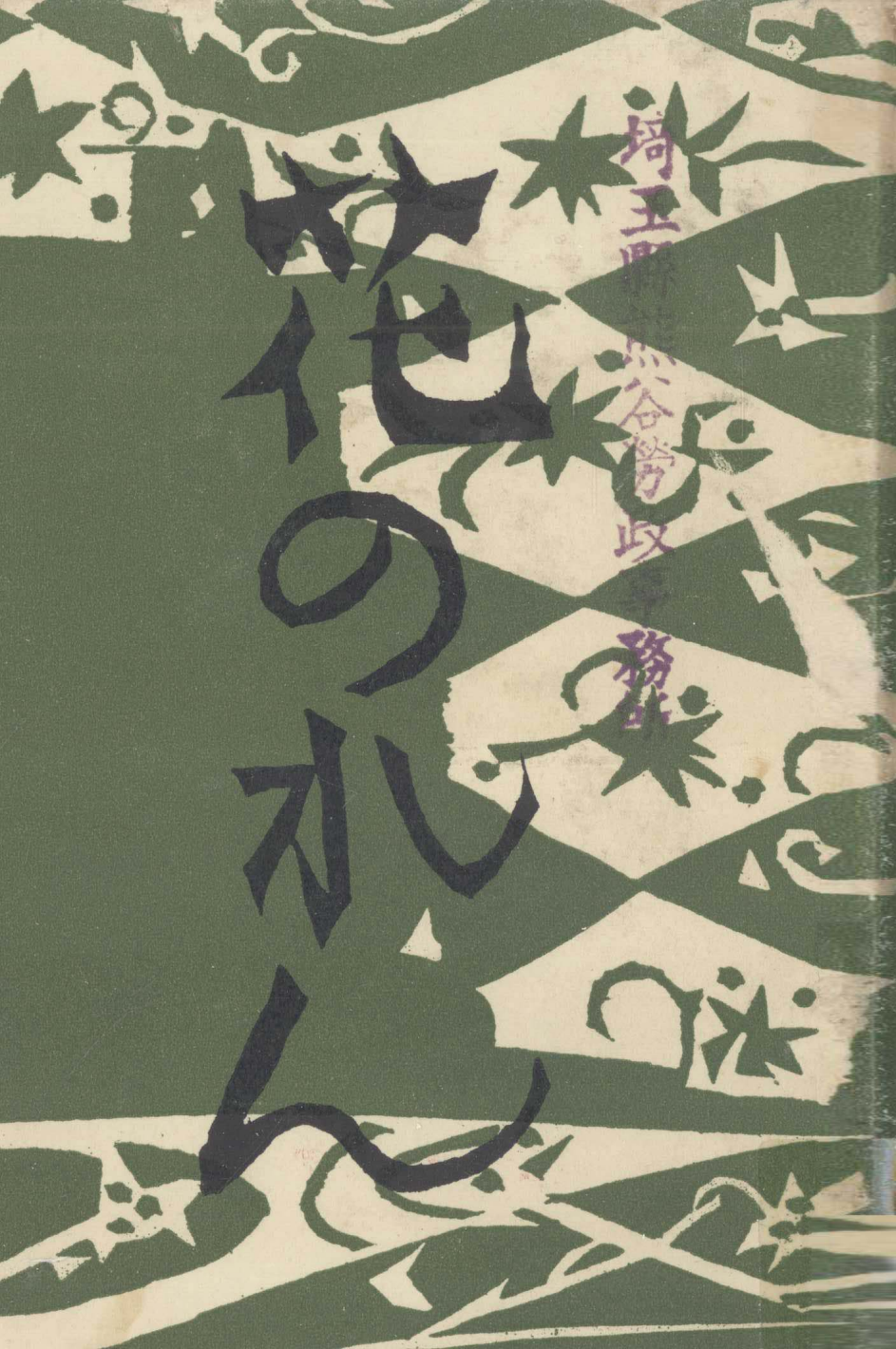


花
代
の
か
ん

埼玉
野
山
合
務
政

務
生





花のれん

定価二九〇円

昭和三十三年六月初版
昭和三十三年十月十日九版

著者 山崎 豊子

装釘者 棟方 志功

発行者 栗本 和夫

印刷者 長久保慶一

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

振替東京三四番

検印廃止

(大日本印刷・協和製本・加藤製函)

花
の
れ
ん

節季になると、船場の町並は俄かに活気づき緊張した気配になる。信用取引が盛んなだけに節季の支払いは几帳面で厳しい。表口の大坂格子からずつと見通せる店の間は、暗い昼燈の下で畳が黒光りするほど掃き浄められている。漆喰の店庭は、奥深い裏口まで続く通庭になり、打ち水をしたばかりのあとが、絞り模様のように濡れている。この通庭の片側に、店の間、中の間、台所、奥の間が細長く並び、店の間と中の間は中振りのくぐりのれんで仕切られている。

六畳ばかりの間の間に、大きな支払い台を置き、その中央に主人が坐り、両脇に番頭が控えて支払いを済ますのが節季のしきたりである。集金の出入り商人は、くぐりのれんの外側で順番を待ち、「お次、お入りやす」

中から声がかかると、一人ずつ中の間の前の通庭へ入り、

「本日の節季、おおきに有難うさんでござります」

と挨拶する。上り框に並べた木綿座布団を勧められても、申し合せたように座布団には腰を下さず、上り框の端にちよつと手をかけて、土間に腰を屈めてしゃがんだままである。大番頭が請求書の金額を読み上げ、ほかの一人が算盤を入れ、

「紙箱屋の箱吉はん、メめて十円五十五錢也だすなあ」

「へえ、お勘定の通りだす」

と応答すると、真ん中に坐った主人が、傍らの手金庫からそれだけの金額を勘定盆に入れ、

「お待ち遠さん」

ここではじめて集金の労を犒う。

「またどうぞ、ご贖肩に」

上り框に頭を擦りつけて挨拶し、判取帳に領収の判を捺して、集金を手早く掛取袋に納めて、引き退るのが、出入り商人の作法だった。

こんな集金の商人で市がたつほど中の方が賑わい、店先の出入りが多いほど、その店の繁昌を触れることになる。商売上の取引はもとより、酒屋、呉服屋などの奥内の掛取、さらにお茶屋や料理屋などの仲居頭の粋な集金姿でも目だとうものなら、またその店がそれだけ繁昌ということになる。店先で買物するお客の後を腰を屈めてすりぬけながら、厚司を着た出入り商人が、

「おおきに、節季有難うはんで——」

と、店で商いする手代、丁稚にまで挨拶して帰られると、パッと店先が景気づく。節季の日の船場の商家町は、師走の売前のように、気忙しく、銀行へ金の出し入れの使いに行く丁稚の足どりまで、せかせかと急いでいる。

日露戦争後、六年経っていたが、船場の老舗は軒並に商いが賑わっていた。その中で、多加は二百円の金もない手金庫を横にして辛い節季を迎えていた。二週間口の店先には、三月というのにま

だ春物の新柄の用意もなく、陳列棚はもちろん、通い櫃にも貧相な反物しか納まってなかった。使用人といえば、番頭の米助と丁稚二人という肩身の狭いような小人数、夫の吉三郎は金繰りのつかぬ苦しきから、その場を留守にしまっている。それでも節季のしきたりに従って、中の間に大きな支払の台を置き、吉三郎に代って多加がその前に坐っている。

多加は、朝から何度目もの辛い断りを重ねていた。仕立物屋や染物屋の小口は何とか払えたが、京都の呉服問屋、織元などの大口になつてくると、もう半分だけで、あとの半分は待つて貰うしか仕方がなかった。番頭の米助では断りが利かず、近頃、急に荒れ出した多加の指で、せちべんな（しぶい）算盤を弾いて、

「この辺で、今日は堪忍しておくれやす、あとはすぐ来月にでも入れさして貰いまっさ」

卑屈な愛想笑いで頼んでみても、素直に宜しおますと答えてくれる者はなかった。こんな支払いの悪さが、ここ半年ほど続いてみれば、怒る先方が当り前やと、多加は氣の弱い笑い方をして、ただ、

「すんまへん、堪忍しておくれやす」

と同じ言葉を繰り返して、頭を下げ倒して一銭でも支払いを減らすよりほかは無い。しまいに米代が一升十二銭と頭に置き、一回頭を下げたら何銭、二回で何円、三回でいくらと卑しい算用をしながら、頭を下げ倒して払いを待つて貰う。向いや隣りの店先からは、いやらしいほどのお追従笑いや、お世辞を並べたてながら出入りする集金人の声が聞えるが、多加の店先から出る集金人はきまつて、仏頂面で横柄だった。店先の丁稚がおどおど怯えるように、

「おおきに、ご苦労さんでござりました」

二つ折れになつて送り出して、一瞥もくれず、ふんと鼻であしらうような者が多い。そんな出入り商人の、一人、一人が多加の身を削ぐように辛かった。昼頃になると、もう丸髻の根が締めつけられるように凝つて来る。頭と気の凝りでろくに食欲もなく、じつと薄暗い中の間の支払い台前に坐り続けていた。

「ごめんやす、京都の織京おりきょうでござります、今日の節季を戴きに——」

という店先からの声を聞くなり、多加は息を詰めた。番頭の米助も膝を硬くしている。断りようなないほど借金の重なっている京都西陣の織元、織京の主人であった。この人に来られたらもう断る言葉も、と思つていた矢先だけに、店の間を通りぬけて、中の間の上り櫃の前に立たれてみると、挨拶のしようも無かった。多加は、いきなり豊に顔をこすりつけた。

「ほんまにすんまへん、今日お払いでけまへんので、もう一カ月待つておくれやす」

「御寮人ごりょうじんさん、今月でもう半年お待ちしますのんどす、うちも染そめや織おりの職人遊ばしてるのやおへん、ちゃんと働かして手間賃払うてるのんどっせえ、それで旦那はんは」

「それが、朝から出かけたまま、留守致しておりまんで——」

「え、この節季にお留守——、大阪の商人いたら、年中妾宅住まいしてはる道楽者の旦那はんでも、大事な節季にはちゃんと支払い台の前へ坐るもんやと聞いてますのに、一体、どこへ行かはりましたんどす」

「朝、銀行に金策に行くいうて出たまま、何処へ行きはったのかさっぱりわかれ致しまへんので

「そんな阿呆みたいな話おすかいな、奥にでもいてはらしまへんのどすか、節季やいうのに殺生な！」

織京おりきょうの主人の頬骨の高い顔が、怒気を含み、骨張った体が、急に節くれだつたように硬いばつて居丈高たけだかになつて来た。

「任ままに恰好の悪い話で……店の者に探させましてんけど……ねっから行先が……あっちゃこつちやで……」

跡切あとぎれ勝ちな多加の言葉に追つかぶせて、

「御寮人ごりょうにんさん、手前どもは先代からのお取引で、京もの呉服一切を納めさせて戴いてましたさかい、今日まで半年、黙ってお待ち致しとりましたんどす。船場のお取引は、売方は売上帳に記入するだけで、契約書一枚取り交さんと口と口、手と手を打って売買するのも、節季の払いに信用を置いてゐるからやおへんか。その節季に旦那はんが断り一つ云いはらんとお留守にしましては、大阪では商いが通らんようになれしまへんどすか。京商人が、えらい差し出がましいご意見するようですけどな」

丁寧な柔かい京都弁であつたが、一語、一語が多加の心に粘りつくような皮肉である。

「ええ、そら、うかがわんかてようわかってますけど、なんしご承知のような手元の苦しさでおますので——」

「御都合いいはりまんのどすか、ご都合はどこ様にもおますけど、大阪商人には信用取引いう厳し

い約束ごとがおす。御寮人さんごりょうじんも知ってはるように、西鶴や近松の芝居や浄瑠璃でも、この厳しい信用取引しんようしゆりんが因よで死んだりしはるぐらいやおへんか」

二月末の肌寒い日であったが、多加は、熱気に籠められたように帯下に汗がしみ、乳の間に熱い玉のような汗がぬるりと流れるのを感じた。まるで夫婦で節季逃れの芝居を打っているような情無さであった。

夫の吉三郎は、今日の節季の朝になつてから、

「ちよつと加島銀行へ無理云うて支払いの金、都合して来まっさ」

と、深刻な顔をして出て行つたきり、昼過ぎになつても帰つて来ない。番頭と丁稚に心あたりの銀行を探させて見たが、最初に行くと云つて出た順慶町の加島銀行へさえも朝から立ち寄つていなかったと聞いて、多加も諦めた。はじめから節季の辛さを逃げるための、吉三郎の嘘であった。

「いや、御寮人さんがそないに血相を変えて恐縮してくれはつても仕様おへんどす。ともかく手前の方の店卸しもおすさかい、旦那はんがお帰りやすまで、ここで気長う待たして貰うて、今日は何とかお払いを頂戴さして欲しおすな」

語尾をぐいと多加の胸に押しつけるようにして云い終ると、あとは口を喋つぶんで中の間の上り框の座布団に腰を下し、煙草盆を引き寄せるなりゆっくり煙草を喫み出した。女中のお梅が氣を利かせて湿い番茶を出したが、番茶には手をつけず、二本目の煙草を喫みはじめ、話の接穂つぎほも出来ないほど押し黙っている。

多加は、どんなことがあつても今日は取りたてて帰ろうとする織京おりきやうの心づもりを感じ取つた。ど

うすることも出来なければ、辛抱強く根を続けて断るよりほかはない。辛抱なら昔から馴れていると心に決め、多加も支払い台を隔てて織京と向い合つたまま、頑なに俯いて坐り続けていた。

河高屋呉服店は、吉三郎の父の吉太が創めた商いであつた。吉太は夜店で古着の商いをしながら、やつと伝を求めて船場の呉服問屋へ奉公したが、十四、五の丁稚の多い中で、二十歳を過ぎていはひねた丁稚であつた。のれん分けして貰うまで待つていては働き盛りの人間の匂を失つてしまふと分別し、のれん分けを待たず、二十八歳の手代の時に西船場の横堀筋の材木屋のあとへ小さな呉服店を構え、新品と古着の両方の商いを始めた。明治十年ごろの船場の呉服店で古着を商うことは、人の意表に出たことで、節約な御寮人さんや御家はん(女の隠居さんのこと)の人氣を得た。新品を買いに来るついでに、流行りすたれの着物を持つて来て、そつと袂の下から新品の値段の足しに――と出すのだった。これを安く買い取り、商家の女中頭や番頭の女房たちに、新品同様の上等の古着として売つたので、瞬くうちに商いが繁昌し、一間の間口を二間間口の店構えに拡げた。吉太の女房のきくは、商いの手伝いには役立つたが、一人息子の吉三郎の躰が出来ず、いつも吉太から小言を言われ通しだった。吉三郎をもうけてから十年目に、思いがけず二回目の妊娠をしたが、間もなく六カ月目の流産で、きくも命を奪られた。そんな苦勞があつただけに、吉太は、堀江の小堅い米屋の娘であつたけれど、健康で甲斐甲斐しい多加を、息子の吉三郎のために特に望んだらしい。

初めの見合いは、縁談の口をきいた伍之助棟梁の家で、棟梁の擬っている盆栽を眺めながらでもというので、多加の父は気楽に考へて、多加と一緒に姉の佳代も連れて同席した。吉太は、顔の道具がばらつと大きく、いかつい侍役者のような顔をしていたが、息子の吉三郎は死んだ母親に似

たのか、大きな切れ長い眼もとに女のような優しきがあり、肉附きのよい鼻と、男にしては赤味のかちすぎる唇をもっていた。父親に似ているところといえは五尺五寸の豊かな上背だけだった。いかつい父親のうしろから、柔和な眼ざしで黙って姉妹を見詰めていたが、盆栽の話になって来ると、急に、しゃぼてん栽培の苦心を面白可笑しく喋り出した。喋りながら、熱っぽい眼で時々、姉の眼をのぞき込むようにしているのを、多加はそれとなく感じた。多加と佳代の顔を等分に見て話しかけているように見えていながら、その実は、姉の佳代に話しかけている。姉の佳代は美貌の自分より先に起った妹の縁談に気を重くしていた際だったから、吉三郎の興味が自分の方にあると気附くと、妙に浮わつき、何時もより甲高い笑い声で肩をくねらせた。多加は頼りない思いで父の孫一と、河島吉太の顔を時々、不安気に見上げた。父は無関心なのか、解っていて素知らぬ顔をしているのか、律義者らしくにこつともしない無表情な顔で、吉三郎のしゃぼてんの話に耳を傾けていたが、吉太は多加と顔を合せるといたわるように笑ってくれた。優しいお人やと、多加は心の中でほっと安心した。その後も、三度、吉三郎と会ったが、いつも必ず姉の佳代の消息を聞き、浪花あられを姉の土産にことづけた。縁談の方には何の支障もなく、見合いをしてから二カ月目に、多加は船場の西横堀筋の河島屋呉服店へ嫁いだ。

舅の吉太は、呉服の仕入れ、値入れから、仕立物屋の仕事の良し悪しの選び方まで、小まめに多加に教え込んだ。習い覚えで多加が上手な商いをする度に、着物を一枚ずつ新調して増やしてくれたが、多加が嫁いでから半年目に呉服屋の付き合いの宴会から帰って来て急に腹痛を訴え、腹を振って苦しみ出し、すぐ医者呼んで来たが手の施しようもなかった。生牡蠣なまがきの中毒には打つ注射も

ないというのだった。それでも多加は、店から紅絹もくろを持って来て、舅の腹にぐるぐるまき、痛みを止めるようにきゅっきゅっとひきしぼった。吉三郎は離れの座敷で頭から布団をかぶり、耳に綿の栓を詰めて父の苦悶する有様から逃げていた。歯ぎしりして苦しんでいた吉太の叫びが急に弱まると、そのまま、体を動かさなくなった。顔を土色にひきつらせ、口から粘っこい泡を吹き出して死んで行った。恐しい死に方だった。多加は、震えながら、冷たい水を手拭に浸して、舅の口元をきれいに拭き、布団からはみ出した体を仏らしく整えてから、大急ぎで白布を出して死装束を縫いはじめた。たった三年前のことであった。

吉太が死んでからの吉三郎は、頭の上の重石おもいしが取り除かれたように、俄かに派手に振舞うようになった。父の在世中は、何時も父の後にひっぱりつけられているように窮屈きうくつそうで、そのくせ父に云い付けられるとこわいもののように云いなりの仕事をした吉三郎が、横柄で怠け者になった。店の商いも、芸者や役者衆の相手なら好んでしたが、窮屈な船場の御察人ごさつじんさんや御家ごえはんの相手はしたがない。その度に、多加は憚はばるような思いで、番頭の米助と二人がかりで堅い商家相手の商いをして来た。

ふと、多加の眼の前で、織京おりきやうの主人の骨張った体が動いた。

「御察人さん、とうとうお帰りやおへんどすな、肝腎の旦那はんは」

辛抱強い沈黙を破り、呆れ果てたような侮りを口もとにうかべている。来月こそ、来月こそと引き延す支払いを根相撲こんすもうで、今日こそは払わそうという織京の魂胆であったが、吉三郎が不在では事実、取りたてようがなかった。

細い首が折れそうなほど、うなだれていた多加は、はっと頭を上げて柱時計を見ると、五時を示しかけていた。織京が訪れてから四時間からになっていた。

「ほんとは申訳ごわへん、長い間お待ち戴きましたのに」

「今日は根限りお待ちして、膝詰め談判でと思つてましたけど、わけのわからん節季の雲隠れで、御寮人さんさえ先行先わからずの黙んまり一点ばりでは話になりまへんどす。せつかく京都から来ましたのどっさかい、ほかの集金にでも廻りますわ」

「ほんまに、えらい鈍なことだ」

と云いながら、多加は素早く手金庫から金を包んで、

「ご無礼になるかも知れまへんけど、京都からお出で戴いたんですさかい、無駄足にしましたお足代だけは、こちらでさして戴かんことには」

相手の氣を憚りながら、思い切つて金包み押し出した。

「御寮人さん、あんさんお若いのに、えらい気苦労でおすな。お志ようわかりますどすけど、それ戴いたんでは、あとお払い強う取れ致しまへん。そやけど、御寮人さんのその几帳面な氣持、ちよつとも旦那はんには欲しおます。先代が亡くなつてからは、この河島屋はんもほんまに左前どすな。仲間にこない噂がたつたんでは、よっぽどしつかりしはらんと持ち直し利けへんどっせえ」

最後に止めを刺すように、語氣を強めると、織京は敷いていた座布団をぱしつと裏返して、出て行つてしまった。終始、無為に手をつかね鈍く背をまるめていた番頭の米助が弾かれたように立ち上り、跣であわてて店先まで見送つたが、織京は振り返りもしなかつた。

何時の間に、中の間が暗くなっていたのか、多加は気がつかなかった。織京かきまきょうの主人に席を蹴られてしまつてから、へたへたと支払い台の上に肘をついて、崩れるように坐り込んでしまつていた。

女中のお梅が、そつと多加のうしろから廻つて電燈を明るくした。女の身ではじめて金のない節季の応対をさせられ、多加は眼頭が痛むほど疲れ果てていた。袴もとがゆるくだらしなくはだけ、朝自分で結い直したばかりの丸鬚びんげんも鬢びんげんの毛がほつれて、急に裏うらを増した。

「御寮人ごりょうにんさん、えらい目に会いはりまして、お疲れでござりまっしゃろ、あの、お番菜ばんさい、勝手に用意さして貰いましたけど」

夜のお番菜ばんさい（おかず）は、必らず御寮人さんに聞いてからでなければ整えられないものであったが、お梅は多加の気疲れに気を兼ねて云えなかつたのだつた。ゆつくり立つて、通庭を通り、台所の次の間へ出てみると、もう夜のお膳あじつまだいが並べられ、番頭や丁稚の貧相な箱膳と向い合せて、吉三郎と多加の脚付台あしづまだいが整えられていた。

「旦那はんのお出先、まだわかれしまへんのん」

「へえ、織京はん帰りはつてからも、番頭はんが心あたり探してはりましたけど、一向に」
お梅は、云いにくそうに答えた。

「へえ、そう、久男はどないしてまつか」

「ぼんぼんは、先に玉子かけのおじやを食べはつて、おとなしう、ねんねしてくれはりました」

多加は、気重に頷いたまま、奉公人たちだけで食事をさせて、自分は二階の居間へ上つて行つた。三つになつたばかりの久男が、好物の玉子かけのおじやに満腹して、独りで眠っている。商いの反

物の残り布で二、三日前に縫い合して作ってやった掛布団が、ふくふくして軽そうだった。昨夜、吉三郎が買って来たばかりのセルロイドの円い軋ばし人形が、十六燭光の暗い電燈の下で毒々しいほど赤い。このセルロイドの玩具を間にして、昨夜も多加が、

「旦那はん、ほんまにお店悪うなつて来てますけど、明日の節季は大丈夫でっしゃるか」

遠慮がちに駄目を押ししてみると、

「また嫁はんが商売に口出すのんか、船場の御寮人さんは表の方へ口出しせんもんや。奥内の台所のことや、奉公人の為着に気を配つてさえ居つたらええ。お父はんが死んだら皆わいの采配やないか、黙つててんか」

と云うなり、ごろりと寝転んで、詩吟を唸りはじめた。日露戦争のあとから、流行っている詩吟に吉三郎も凝って、町の道場にまで通って稽古をしている。豊かな上背をのびのびと伸ばし、筋の通った鼻柱を得意気にひくひくさせながら、朗詠している吉三郎をみると、いかにも身勝手な一人息子の旦那はんであった。結婚してから四年間、自分一人がぎりぎり切り詰めた気持で働いて来たような気持もした。自分を本心から愛しんでないのかといえば、別にそうでもなく、夫らしい気の遣い方はしてくれ、子供にも人一倍子煩悩ではあったが、所詮は商人には向かない人というよりほかがなかった。

「御寮人さん、旦那はんが——」

かすれた声で、番頭の米助が敷居際から伝えた。

「あの、新町から御寮人さんに迎えに来い云うて来てはりますねんけど——」